

# 「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」ことについての の教員養成課程の講義のあり方

著者	山崎 正明
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要
巻	2
ページ	191-197
発行年	2017
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002487/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002487/</a>

# 「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」ことについての 教員養成課程の講義のあり方

“An infant learns through nature and concerning.”  
the state of the lecture of a teacher education course about a fact

山 崎 正 明

Masaaki YAMAZAKI

## 1 はじめに

2007年から文部科学省で実施している「全国学力・学習状況調査」は、当初文部科学省が意図したこととは一部では別の方向で動きは始めている。都道府県別の平均点を公開したことによって、結果として各都道府県の児童・生徒の学力がランキング化されてしまったことである。これは数値向上のための競争を生み出したともいえる。「ゆとり世代」という言葉と共に、世論は狭い意味で「学力」をとらえるようになってしまったともいえよう。「全国学力・学習状況調査」での数値向上は学校教育の成果を問うための大きな指標となってしまった。さらに短時間で数値で成果を出さないとならない。さらに英語教育の小学校への導入もあいまって、より早期から教育することが、是とされる風潮を生み出した。こうした傾向は「幼児教育」への影響として一部に出てきている。例えば私立幼稚園において「英語教育」を最近になって導入したこともそれである。それは「環境」や「遊び」を通してという英語教育ではなく、小学校の授業のような形で用いられたものである。

幼児教育では「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものである」<sup>1)</sup>ことが基本であるが、学力を数値で捉えてしまう世論からは理解されにくい状況に置かれている。こうした状況下では本稿で示す「幼児が自然との関わりを通して学ぶ」ことの意義や価値については蚊帳の外に置かれている状況である。

## 2 研究の目的

学力向上の目的のため、数値のみに振り回されるのではなく、幼児教育本来の環境を通した教育というあり方を踏まえ<sup>2)</sup>、その中でも「幼児が自然との関わりを通して学ぶ」ことを充実させることを目的としている。

1) 現行「幼稚園教育要領」第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本

2) 2016年8月「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 幼児教育部会 幼児教育部会」から「審議の取りまとめについて」という報告があった。次期「教育要領」の方向性が見えつつある。

### 3 研究の方法

幼児教育本来のあり方を踏まえた教育をすすめるために、その一つの大切な手段として教員養成課程における「講義」を充実させることがある。本稿では、北翔大学教育学科の講義「保育内容（環境）」において、「幼児が自然との関わりを通して学ぶ」ことの意義や価値を、学生が深く実感できるように講義を工夫し、改善する。本稿ではその成果と課題を示す。

### 4 講義「保育内容（環境）」について

講義「保育内容（環境）」について以下の視点を重視した講義をおこなった。

- ・「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」意義や価値を感じる講義
- ・教員になり教育的実践力を身につけることができる講義

#### （1）理論面～「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」意義や価値を感じる講義

前提としているのは「幼稚園教育要領」および「幼稚園教育要領解説」であり、そこには意義や価値が明確に示されている。しかしこれを理解しただけでは不十分である。講義で学んだ学生が、実際の教育現場で強い意志を持って実践するためには、学生が講義における学びの価値を強く実感することが必要である。

そこで「幼児が自然との関わりを通して学ぶ」ことの重要性を示す根拠としてレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」<sup>3)</sup>を用いている。

まず、レイチェル・カーソンの次の言葉を中心に扱った。「『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。」

この言葉をもとに小学校の学習へのつながり、生涯を通じての学びにつながっていることの根拠を示しつつ、学生自らにこれまでの自身の幼児期から自然を通しての学びを振り返る場を設け、共有化を図った。さらに「センス・オブ・ワンダー」の中で示されている「自然」についての学生自身の実体験を通した「ワンダー」や「感動」あるいは「よさ」について、ワークシートを用いて振り返り、ワールドカフェの手法を取り入れ、それぞれの持つ「自然観」を共

---

3) 「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳（1996年）

有した。このことを通して学生の自然の捉え方が、一気に広がると共に、身近に感じられるようになった。実際に言葉にして自然が持つ価値について語り合うことで、学生の中に「自然を通した学びの意味」についてのとらえ方が広く、深くなったといえる。また都会に生活している学生であっても、豊かに自然のよさや美しさを実感していることを共有できたのは、非常に大きな意味があった。

学生はこの講義を振り返り、以下のような言葉を残している。「自分と違う環境で育った人の話はとても興味深かったです。大地、自然の凄さを感じると自分の大きな悩みなんて本当にちっぽけだと思いました。自然の凄さを考えさせられた時間になりました。(T.H)」「私は田舎暮らしなので、皆で自然観をシェアする際は都会暮らしの人はどういうところで自然を感じるのだろうと思って話を聞いた。話を聞くと、自ら自然も見つけに行ったり、たまには自然を感じることもあったりなど様々だったが、都会に住んでいても人は自然と必ず関わりあうものなのだと強く感じた。田舎に住んでいても感じられない自然が都会で感じられるとことがあると思った。その環境、自分が置かれている環境ならではの自然を見つけていきたいと思った。(K.M)」

また、映画「レイチェル・カーソン感性の森」<sup>4)</sup>をDVDで視聴し、「自然を通した学び」の意義や価値は、人類の課題を意識したうえでの教育の課題であることを実感できるようにした。講義において学生は以下のような言葉を残している。

「自然が子どもに与える影響は大きい。自然で遊ぶとき、子どもたちは持っている感性を全て使いこなし様々な遊びをずっとしてられる。子どもたちにとって事前は遊園地でありおもちゃ箱なのだ。自然から学ぶ生命や感覚、興味、好奇心、謎はとても貴重なものである。子どもたちは自然と触れ合っているときは何も教わずに行動できる。幼児期にこうした経験をすることはとても大切なのだが、今はその機会が失われつつある。自然に限らずとも何も概念にとらわれず、縛られずに自由に自分が表現できる環境、それを大人たちは子どもの与えるべきだと思う。少しの時間でもこういった環境をあげた子供の感性は豊かになるだろう。私たちは、子供たちのために環境や機会を減らしてはいけない。(中略) 保育者は、自然について学び、理解し、子どもたちにどんどん提供すべきだ。わたしは子供たちが「自然から学ぶ」環境を整えることができる保育者になりたい。(H,Y)」

「自然が身近にあるべきだと思う。自然を感じなければそのよさも怖さもわからない。発展することは大切ではあるが、自然とともに暮らし、自然の中で生かされているのだと理解していく必要がある。「人間が自らの力で作った人工物を過信している」と映画の中で言っていた。(T,K)」

「自然は永久普遍的な営みとして、これからの未来でも命のサイクルを通しながら、子どもた

4) DVD「レイチェル・カーソン感性の森」出演 カイウラニ・リー 監督クリストファー・マンガー 2012 アンブリック

ちの身近なものとして存在してほしいと思いました。そのためには自然環境は人間の利益追求のためにあるのではなく、共生していくことが必要だと思います。(中略) 子どもたちが自然に触れ、豊かな感性を失わないためにも、それを手助けする大人が必要だと思います。そのためにも大人は真実を見失わず環境を守ることが重要だと思います。(H.I)」

「目先のことだけではなく、その後の子供の学び権利のことを考えて行動すべきだともいえました。(T.R)」 「子どもたちが自然と触れ合うことで豊かな感性に磨きがかかり、物事の捉え方や考え方もより豊かになっていくと考えます。(N,A)」 「大人になると、美しいものへの子供の頃よりも鈍くなってしまう、センス・オブ・ワンダーを持ち続けるためには大人の手助けが必要である。」という言葉から、幼い頃から自然の美しさ。不思議さに目を向けることが大切であると思いました。現代の子どもたちはコンクリートとビルに囲まれ、なかなか日常的に自然に触れる機会自体が少ないと思います。ですから、大人は自然に触れる機会をつくってあげることが未来の子どもたちにできることなのかなと思います。自然を美しいと思える気持ちは、人への思いやりの気持ちや豊かな感性、または道徳性につながると思います。生きる力を育むためには、自然を美しいと感じら獲るような心を育てられることが大切であると思いました。(N,M)」

## (2) 実践面～教員になり教育的実践力を身につけることができる講義

教師になったときに理論をもとに実践できることが、非常に重要である。講義においては、都会の一見自然の少ないところでも実践可能であることを想定した内容にし、いつでも、どこでも 教師の工夫によって「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」ことができるような内容を目指した。あわせて活動を通しての幼児の学びを常に意識し、活動そのものが目的化しないようにした。また、学びを意識した活動を想定することは、常に本質を考えることになるため、教師としての教育実践についての応用力がつく。

幼稚園や保育園では、教師が自然に目を向ける活動としてもっと一般的な事例として、外に出て自然に触れるということがある。その内容を充実させるための講義を実施した。具体的には、大学周辺の敷地内の庭、および近隣の野幌自然公園でフィールドワークを実施した。フィールドワークでは、幼児の気持ちになってということで、幼児の目の高さを



材料を見ていく中で、自分のつくりたいものがはっきりしてくる。イメージに合わせて自然素材をセレクトする例。ここで大切なのは、子供が自らイメージを生み出すということである。

意識することと、気にいったもの、おもしろいものを見つけてもってくることにした。このことを通して大学自身が自然から様々なことを発見し、驚き、美しさに惹かれていた。それは科学的な視点であったり、美的な感性を働かせた視点であったりした。普段の大学生活では忘れてしまっている学生がほとんどであった。しかしながら、こうしたことは「保育内容（環境）」の講義の一環として行われていることであるため、目的意識を持っていることがあるということに留意しなければならない。実際の保育の場面では、園の教育計画はもちろん、日々の環境の構成、教師の投げかけなど、意図的・計画的があつてのことである。

さて、講義では自然に出かけて学生たちが持ってきた枝や葉、木の実など、自然物をもとに、ものをつくるという活動をおこなった。自然を自分の手で加工しながら、何かを生み出す体験である。このようなことは学生も幼児や小学生の時に体験している。ただし、実際の教育現場でも行われている何かをつくらせるために、手順を示したり、見立てを教師が示したりすることで作品をつくることを目的化した内容にしないようにしている。これは「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」ことから離れがちになるためである。このことは、幼児教育雑誌にも散見されることである。この講義では、あくまでも、自然物をどうとらえ、見立て、生かすかの決定権は子どもにおくことにしている点を確認して、実際の制作活動をした。

制作の視点では5才児を想定している。

制作活動終了後は互いにできあがったも



自然素材を使って、新たな自然を生み出している例。これは、たくさんの変わった実がなる木であるが、こうした活動の中で自然の持つ不思議さや美しさに気がついていく。



自然の面白さに気づき、その色や形を生かしてつくったもの。こうして気軽にすることができるとは、自然と親しむという意味で望ましい。



のを鑑賞したが、そこでは見る側が自由に感想を述べたあと、今度はつくった側が、可能な限り制作過程で具体的に考えたり、感じたりしたことを制作の順にそって説明するようにした。こうすることで子供が感じたり、考えたりすることを大切に受信しようとする態度が生まれる。

「上手だね」の一言で片付けるようなことではなく、学びの過程を大切にする教師でありたい。



学内の庭でつくったものである。こうしたものは周囲の環境との関わりで生まれることが、一番の面白さである。並べたり、重ねたりするもっとも遊びの要素が多い。

## 5 おわりに

今後、ITがどんどん進化していく中で、AIが人間にとってかわる部分が多くなっていくことは間違いのない事実である。そうしたときに、AIではできないこと、そうしたことが益々重要になっていくであろう。

特に自然のよさや美しさ、あるいは畏敬の念などは、実際に体験してこそというものは、これからの教育で重視されていくことになろう。特に教育の基礎を担う幼児教育においては「幼児が自然と関わりを通して学ぶ」ことの意義や価値の重要性を実感としてわかっている教師の存在が重要である。

そうした意味での教員養成課程の取り組みは重要であり、さらなる授業改善をすすめていきたい。

今後は限られた講義の時間数の中で、



初雪の降った朝、雪の上に落ち葉が。通学途中の学生がその美しさに気が付き、写真に撮った。こうした意識の変化が学生の中で起きている。

内容をどう充実させるかが課題である。今回、本稿ではとりあげなかった環境を通した学びの様子の写真やビデオなどから分析していく形を考えている。

### 参考文献

- 1, 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008年
- 2, 文部省「幼稚園教育要領」1989年
- 3, 厚生労働省「保育所保育指針解説書」2008年
- 4, レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」上遠恵子訳 新潮社 1996年
- 5, 多田 満「センス・オブ・ワンダーへのまなざし レイチェル・カーソンの感性」東京大学出版局2014年
- 6, 無藤隆 福元真由美「領域 環境（事例で学ぶ保育内容）」萌文書林 2007年
- 7, 秋田 喜代美「保育内容 環境 第2版（新時代の保育双書）」みらい 2009年
- 8, 高内正子「保育実践に生かす保育内容「環境」」保育出版 2015年
- 9, 酒井 幸子「保育内容 環境—あなたならどうしますか？」萌文書林 2016年
- 10, 秋田 喜代美「保育内容 環境〔第2版〕」みらい 2009年